

障害者スポーツと天理シリーズの3回目は、パラリンピックについて説明し、パラリンピックや世界選手権など、世界で活躍している天理関係の障害者アスリート2名を紹介する。

パラリンピックについて

パラリンピック (Paralympic) とは、4年に1度、オリンピック終了後にオリンピック開催都市で行われている「もう一つの (Parallel) + オリンピック (Olympic)」のことである。この大会に出場するためには、

- ①大会で定められた標準記録を突破
- ②世界ランキングの上位に入り出場権を獲得
- ③世界選手権大会や地域選手権大会で出場権を獲得

などの厳しい条件をクリアしさらに国内の競技団体に選考されなければならない。世界のトップアスリートだけが出場できる国際競技大会である。競技種目は次のとおり。

<夏季競技>

陸上競技・水泳・車椅子テニス・ボッチャ・卓球・柔道・セーリング・パワーリフティング・射撃・自転車・アーチェリー・馬術・ゴールボール・車椅子フェンシング・車椅子バスケットボール・視覚障害者5人制サッカー・脳性麻痺者7人制サッカー・ウィルチェアーラグビー・シッティングバレーボール・ボート

<冬季競技>

アルペンスキー・クロスカントリー・バイアスロン・アイススレッジホッケー・車いすカーリング

以上、夏季20競技、冬季5競技である。

天理関係の障害者アスリート

藤本聡さんは徳島市・国富分教会所属の柔道選手である。藤本さんは先天性の視神経異常から左目が見えず、右目も弱視である。父の勧めで5歳から柔道を始める。21歳でアトランタパラリンピックに出場、金メダルを獲得した。その後、シドニー、アテネパラリンピックと3連覇を達成。2008年北京パラリンピックで前人未達の4連覇を狙ったが惜しくも銀メダルとなった。しかし、藤本さんは柔道選手として世界が認めるトップアスリートである。現在は徳島県立盲学校で教員として働きながら柔道部の顧問として指導を行いつつ、自身の鍛錬も行っている。

視覚障害者の柔道と健常者の柔道との大きな違いは、「組み合った所から始まる」という点だけである。しかしながら柔道は相手がいるスポーツである。健常者の柔道選手は視覚情報に頼って試合を進めることが多い。また、健常者の柔道は組み合うまでに間合いを取るなど時間をかけるが、視覚障害者の柔道は試合開始後、すぐに組みあい、5分間フルに力を使い、神経を研ぎすませるので健常者の柔道より非常に疲れると言われる。また、藤本さんは目が見えないというハンディをものともせず、国体柔道成年の部で徳島県代表として出場経験がある。今後もロンドンパラリンピックを目指しつつ、世界を目指す弟子たちを育ててくれることを楽しみにしている。

中西彩さんはアーチェリー競技で活躍するトップアスリートである。2004アテネパラリンピック、2008北京パラリンピックに出場し、北京大会ではメダルには一歩及ばなかったものの、

第4位と次のパラリンピックにつながる好成績を収めている。パラリンピック以外にもフェスピック大会で金メダルを獲得するなど世界の大会で好成績を残している。

中西さんは先天的に背骨の形に異常がある

二分脊椎症である。中学時代はひきこもりがちだったが、それを危惧した父、康祐さんに連れて行かれたアーチェリー場でアーチェリーと出会った。パラリンピックのメダリストが車いすの上から悠然と弓を引く姿を見て「かっこいい」と感じ、その日からアーチェリーに夢中になった。障害を持つ娘が、何か自信の持てることを始められればと思っていた康祐さんは自宅近くの田んぼを整備して、射程30mの専用の練習場を作り、後に国際大会と同じ距離の70mまで撃てるよう練習場を改良した。2004年に奈良県立広陵高等学校を卒業後、天理大学国際文化学部アジア学科に入学。韓国・朝鮮語を学ぼうと思ったきっかけは、アーチェリーの各大会を通して韓国が健常者・障害者ともにトップレベルであることを目の当たりにし、選手と交流を持ちたいと思ったことだという。

海外遠征等、競技生活と学問の両立は大変だったようであるが、大学教員はじめ、周りのサポートもあり無事卒業。現在は天理大学職員として学生の対応等、コツコツと仕事をこなしている。就職した頃は、これまでの学生生活とは違い、一社会人として働くことで練習時間の確保がなかなか難しかったようである。思うように練習ができない状況の中、目前に迫る北京パラリンピックで、自分の実力が発揮できるのかどうか、とても不安であると当時、中西さんが話してくれたことがある。しかしながら北京大会で4位入賞という好成績を残したことは、彼女の並々ならぬ努力の成果であろう。現在は仕事にも慣れ、多少の余裕ができたため、新たな挑戦も始めている。もちろん、競技にも力を入れ、ロンドンパラリンピック大会も視野にいれて練習に励んでいる。

中西さんはアーチェリー競技を他の選手より早くに始めたため、すでにベテランと呼ばれているが、実際にはまだまだ若い。競技でトップを目指しつつ、さまざまなことにも挑戦してほしいと願っている。また、アーチェリー競技は障害者が健常者と同じ土俵で対等に戦える数少ない競技スポーツである。実際、オリンピック大会に車いすの選手が数名、出場している。中西さんは高校時代、インターハイへ3年連続出場をし、決勝ラウンドまで進む活躍をしている。中西さんがパラリンピックにとどまらず、健常者が出場する世界の大会で活躍し、アーチェリーを楽しまれることを願っている。

[参考資料]

・財団法人日本障害者スポーツ協会ホームページ

<http://www.jsad.or.jp/index.htm#home>



北京パラリンピック ボッチャ競技決勝の様相 (2008年9月)